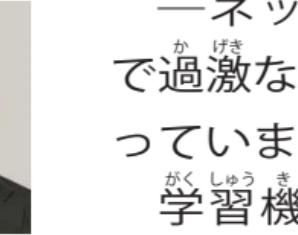


子ども × マナブ



川島
しま
さ
隆
りゆう
③ん太
た

スマホは「必要な時」にだけ

—ネットやSNS（交流サイト）上で過激なやりとりが目立ち、問題にもなっています。

学習機能を持った生成AI（人工知能）が「人間は過激な文言に飛びつくから、記事が注目されやすくなる」ことを学んでしました。皆さんは、自分たちで情報を選んで拡散したり、炎上が起きたりしていると勘違いしている

す。実際は過激な情報が目にとまるよう、AIが裏側で働いています。

—この10年で子どもたちを取り巻く生活環境の変化をどう感じますか。

特にデジタル機器の浸透による「孤立化」は深刻です。スマホがあって、いつも友人や家族とつながっているように感じるかも知れません。例えば家族で食卓を囲んでいても、親も子もスマート勤務でなく出社を奨励し、社員を気にしてソワソワしていては共通の会話も生まれません。

—どうすればよいのでしょうか。

皆さんに一度立ち止まって考えてみてほしいのは「デジタル化で幸せになつたか？」という点です。

「スマホがないと生活できない」とはよく聞くフレーズですが、本当でしょうか。そこに気付いたのが米国の大企業GAF（ガーファ）

と呼ばれる巨大IT企業などです。

自分たちで開発しておきながら社員にはリモート勤務でなく出社を奨励し、社員の子どもにはパソコンを持たせない企業があるのは有名です。

—

「必要な時に使う」だけなら脳に影響がないというデータもあります。逆に言えば「目的がないのになんとなく触らない」ことです。特に、自分の意思で制御できない発達期の子どもを守るために、親が注意する必要があります。子どものSNS利用を禁じたオーストラリアのように社会全体で見つめ直す機会も必要です。

かわしま・りゆうた 東北大加齢医学研究所教授。「脳トレ」ゲームの監修者としても知られる脳機能開発研究の第一人者。